「書物・出版と社会変容」研究会　活動記録

・開催日・場所・報告者・報告タイトルなど。
・八十四回まではバックナンバーを参照。

第八十五回　二〇一三年一一月三〇日
九州大学箱崎キャンパス九州大学附属中央図書館新館
４Ｆ・視聴覚ホール
福岡博多大会
※九州近世文学研究会（雅俗の会）との共催

【報告】
成富なつみ「肥後藩士井沢蟠竜と柳枝軒―広告に見る出版戦略―」
小田真裕「「国学者」宮崎大門の思想」
丹羽謙治「栗原信充の来鹿と薩摩藩版」

【講演】
中野三敏「近世の出版史―技術面より見た―」
福岡大会呼びかけ人　川平敏文・若尾政希

第八十六回　二〇一四年一月一一日　**一橋大学佐野書院**
清水有子「浦上潜伏キリシタンの信仰と書物」
堀部正円「二種類の寛永十九年版『録内御書』」

編集後記

雪とはなにか。

本号を編集作業中のいま、一月中旬。北海道の三度目の冬のまっただ中である。連日のように雪が降る。容赦なくドカっドカっと降る。

こちらに赴任するとき、北海道だから自動車が必要だろうと思ったので、本州から持ってきた。来る前に札幌出身の研究者と話をした。「持ってくって、どうやって持っていくんですか?」「乗っていくんだよ」「はあ? なにいってんのかな。レールの上を走るわけ?」このかみ合わない会話は、私が青函トンネルは自動車も走れると思い込んでいた、馬鹿馬鹿しい迂闊さによる。

その自動車は、前輪駆動＝FFのカローラであった。「無理無理無理、絶対無理！四駆（4WD）じゃないと、北海道の冬は無理！ 雪道で必ずスタックする！ それに寒冷地仕様じゃないと！」寒冷地仕様とは、冬期のバッテリー上がりを防ぐため、大きなバッテリーにすること、セルを強力にすることなどである。当然、寒冷地仕様の自動車は割高になる。私の父が自動車修理工なので、老体に鞭を打って、寒冷地に対応するように改造してくれた。

それにしても、「冬の北海道って、そんなにスゴイのか?」脅かされているような気もするが、ホントのような気もする。不安なまま、フェリーで小樽に渡った。

到着したのは、四月二日の未明、四時三〇分のことであった。小樽は山に囲まれている。フェリーから降りるときにみた、うす暗い空に寒々と銀嶺が浮かび上がった風景を、いまもまざまざと思い出す。

大学は、札幌市とは名ばかりの、石狩川にちかい豪雪地帯にある。準・岩見沢級に降る。同じ札幌市でも、南区や豊平区はそれほど降らないが、北区は降る。その北区のなかでもダントツに降る。

通勤は市街地から、創成川沿いの片側三車線のまっすぐな道を、ひたすら北進し、篠路（しのろ）（最初、しのじ、としか読めなかった）の交差点で右折して東進、あいの里というところの大学に至る。もともとは、市街地の中心部の山鼻にあったのだが、なんでも、三〇年ほどまえに、学園都市計画の目玉にするのだと、「ダマされて」（と、皆いってる）郊外に移転してしまった。

一月になると、広い創成川通りが、雪で狭まり、三車線が二・五車線ぐらいになる。センターラインは見えない。そのアイスバーンを、「ここは三車線だべ！」と走ろうとする車と、〇・五車線を切り捨てて「二台分の幅しかないんだから、二車線しょ！」という車が入り交じる。二・三・三・二というサッカーのフォーメイションみたいな陣形になり、なまら……あ、非常に危険である。「日米対抗ローラーゲーム」みたいだ。「ぶつからないのかな」と危惧するが、やはり、ビンゴ河野の頭突きをくらったように、よくぶつかっている。

北区の自宅を出たときは晴れているのに、大平（だいへい）を過ぎるころ雪がちらつき、篠路交差点を曲がると、猛吹雪というようなことがよくある。同じ北区でも三度気候が変わるわけだ。

気温も札幌中心部とは、三度～五度ぐらい違う。極寒時はマイナス一〇度以下になる。マイナス五度ぐらいになると、自動車のドアが開かなくなることがある。サイドブレーキを引くと、車体の下についた水滴が凍結し、「サイドブレーキが動かなくな

るから、引くな」と教えられた。大学から一キロほどのところにペケレット湖があり、分厚く氷が張るため、ワカサギ釣りができる。全く、ワイルドなところにある大学である（そういえば、夏は大学構内でジンギスカンをやっている）。

フロントガラスのウォッシャー液は、原液のまま使用しなければ凍ってしまう。カギ穴が凍ることがある。「ライターでキーをあぶって回すんだ」という裏技を伝授された。なので、タバコを吸わないのに百円ライターがポシェットに入っている。もっとも、ホームセンターにいくと、キンチョール・スプレーみたいな、「解氷スプレー」というのが売っていて、氷がジェル状に溶けるやつを買ったので、ライターあぶりは試したことがない。

公共交通機関もよく途絶する。「内地」に比べると除雪体制は整っている。それでも、ドカっと降ると、電車・バスが止まる。ちなみに、「内地」とは、内地留学のように、国内の意味で使うが、北海道では本州を「内地」といっている。「じゃあ、北海道は「外地」なんか？」と聞いたことがある。すると、「だって東京にいくのは、外国にいくみてえだべさ」という応えが返ってきた。

その厳寒の降雪期にセンター試験をやる。この時期に全国一斉にやるということは、雪国には圧倒的にハンディがある、ということだ。南北に長い日本で、力業で一斉にテストをする。その根底には、中央からの指令にしたがって、国民は均質にあれかし、という「国民国家」幻想があるような気がしてならない。均質だが不平等だ。

赴任した初年度、「今年の雪は異常だった。こんなに降ったことはない」と皆いっていた。しかし、毎年、前年を上回る積雪で、異常が常態化している。昨年、除雪した大量の雪が、八月になっても溶けなかったのも史上初であった。

大学の周囲を「あいの里緑道」という遊歩道がめぐっている。一二月中旬になると、雪で閉ざされる。そこを、「雪中行軍」と称し、八甲田山ゴッコをする。天候は激変する。風が猛烈にでてきて、遮蔽物がまったくない雪原に飛雪、地吹雪が巻き起こり、視界ゼロ、リアル八甲田山になったりする。

時折、すっきりと晴れ渡ることがある。一面の白い雪景色と、突き抜けるような青い青い空のコントラストは絶景である。大学の展望階に上がると、西に小樽の祝津岬、南方に手稲（ていね）山や大倉山、大学のすぐ裏を流れる茨戸川などが一望できる。北の大地の雄大な眺めである。

問題の前輪駆動車であるが、まったく問題なく走行できた。真冬の中山峠を越えることもできた。ただし、駐車場に傾斜があり、二回牽引してもらって脱出したことがある。だが、驚くなかれ、雪にはまった車を牽引して救出したこともある。苦楽をともにした愛車である。

北海道の三年間は、春を待たずに、雪との闘いで幕を閉じることになる。いざ、去るとなると、雪国ならではの風情に、惜別の念が湧いてくるから、感情とは不思議なものだ。……こんなことを考えながら、深雪をサクサクと踏みしめて、残り少ない北の大地での日々を送っている。（小川記）

雪で閉ざされ前人未踏となった、夕暮れ時のあいの里緑道。ボクの前に道はない、ボクの後に道はできる。